

<訓読のみ言>

『真の父母經』

第十三篇 復帰摂理の完結と天一国の定着

第三章 真の父母様の生活哲学と公的生活

第一節 真の父母様の生活哲学

11 み旨の道を歩む時に、世話になろうという人は、父母の肉をえぐる人であり、骨を削る人です。私は、天のみ前に負債を負おうとは思いません。負債を負わせようとするのです。神様が私の前に現れて、「そろそろ少し休みなさい」と言うそのような場でも、どのようなことをしてでも行こうとします。それでも休まない私を見て、一人座って泣く神様を父として侍ろうとするのが、生活哲学であり、志操です。それを誰かが教えてくれたのですではありません。

神様の心の底からにじみ出る感謝の応えとして、「一度会おう。会いたい」と言える父子関係のために、そのような絆のために、今まで生きてきけると、天の保護を受けたのです。ですから、滅びませんでした。だからといって、私が立派だということではありません。知れば知るほど、ますます下がっていかなければならないのです。

12 中心存在になれば、負債を負ったものはすべて返さなければなりません。また、中心存在は責任を負わなければなりません。私が一つ一つ見て回ることができなくても、道端で皆さんに会えば、私の財布にあるお金をすべて取り出してあげるのです。一銭も残さずあげるのです。その人は、一個人ではありません。統一教会員全員に、そのようにあげることはできないので、条件としてその人に与えるのです。私の精誠に従い、私が行く道を助けようという人は、私以上に福を受けなさいというのです。そうすれば滅びません。

私は三十代まで、み旨のためにそのように生きました。学生の時、父母がお金を送ってくれば、かわいそうな人にすべてあげ、歩いて通いました。その時は電車賃が五銭でした。和信百貨店から鷺梁津に行くときは、必ず積善をしていきました。このように、万民の恨を抱き、「お父様、道端で乞食の生活をするこの民に、私が今与えるお金はいくらにもなりません、あなたの心の中において、民族解放とともにこの地の上に富が訪れ、万民が仰ぎ見る国になるようにしてください」と祈りながら、涙を流した生活が忘れられません。

13 お父様は、天のために同情してくれた、忘れることができない人々には、最高のものをもって報いようとする人です。み旨に従っていく道で皆さんに苦勞をさせますが、お父様は無責任な人ではありません。苦勞をさせれば、責任を負うというのです。地上で責任を負うことができなければ、霊界に行っても責任を持つというのです。ですから、お父様とそのような誓約をして行く人は、幸せな人だと思うのです。私は絶対に裏切ることができない人です。少しでも世話になれば、(それを返さない限り)気が済まない人です。根がそのようなのです。神様がそうです。神様は、世話になれば我慢ができないお方です。自分のために十の

ことを尽くしてくれれば、その何百倍、何千倍にして返してあげようとするお方です。皆さんもそのような性分でなければなりません。